

「二度と戦争を起こさぬために」

熊倉三朗

74年前の昭和16年12月8日。冬の気配が日ごとに濃くなり、冷気に首をすくめるような朝でした。

ラジオ放送が、「本8日未明、^{ていこく}帝国陸海軍は太平洋において戦闘状態に入れり」と、大本営（軍隊の最高司令部）の発表を伝え始めたので、聞いていた人たちは思わず食事の手を止めてしまいました。

日本の軍隊は、四年前から中国大陸に入り込み、中国の人たちと戦争をしていましたが、勝つことが出来ませんでした。そこへ、この放送です…「これで日本は、世界中の国を相手に戦争することになったのか」と、顔を見合わせたのでした。

^{しげん}資源の無い日本の国は、広い中国大陸に目を付けて、豊富な^{しげん}資源を自分の物にしようと戦争を仕掛けたのです。戦争に勝てば、^{しげん}資源がタダで手に入ります。

そのころの中国は、政府と共産党が対立して争っていたのですが、日本の^{しんりやく}侵略を許すわけには行かない、と話し合って争いを止め、皆が^{じゅう}銃を持って日本軍と戦い始めました。

広い大陸で、大勢の中国の人たちを相手にしての戦争は長引き、いつ終わるのか見当もつかない状態だったのです。

それを見かねたアメリカは、「日本は、侵略戦争を止めて中国から軍隊を引き揚げなさい」と求めましたが、資源の欲しい日本は戦争を止めずに、戦い続けます。

そこでアメリカは経済制裁として、日本へ売っていた原油の輸出を停止しました。

そのころ日本は、消費する石油の大部分をアメリカからの輸入に頼っていましたが、政府は困ってしまいましたが、軍備に力を入れて「外国には負けないぞ」と、強気だった軍人たちは、「それならアメリカとも戦争だ！ 原油は、東南アジアの島を占領して手にいれよう」と、アメリカやイギリス、オランダなどの連合国を相手にして、戦争を始めてしまったのです。

まだテレビが普及していない時代ですから、戦争の勝敗を知りたい日本の国民には、ラジオと新聞でしか情報が伝わりませんでした。が、「我が軍は、ハワイ島真珠湾のアメリカ軍艦隊を攻撃して大損害を与えた」、「我が軍は、フィリピン島を占領した」と、勝ち

戦の様子が伝えられますから、みんな「バンザイ！バンザイ！」と喜び合いました。

軍司令部の発表は、「敵を攻撃して大損害を与え、我が方の損害は軽微なり」と決まり文句で、日本軍の損失は伝えませんでしたから、勝っていると信じた国民は、軍隊のために生活物資を節約し、「戦争に勝つまでは我慢だ」と、粗末な衣類や食事で暮らしながら戦争を続けました。兵器を作る金属の原料も輸入出来ないので、家庭の金物まで掻き集めて兵器を作ったのです。

しかし戦場は、日本本土から遠く離れた太平洋の島々です。

そこまで武器弾薬や兵員、食料を、輸送船で運ばなければならぬのですが、連合軍は日本軍の補給を遮断する作戦をたて、途中で潜水艦や飛行機で待ち構えて攻撃します。

軍艦が足りなくなって護衛船の無い輸送船は、積み荷もろとも海の底に沈んで行きました。補給が途絶えた日本軍は、弾薬や食料が無くなって島々で全滅です。連合軍はその島々に飛行基地を作り、大型の爆撃機で日本本土の爆撃を始めました。

大編隊が連日のように日本本土に飛んで来て、大都市や軍需工場などを爆撃するので、空襲を知らせるサイレンの音が昼も夜も鳴

り響^{ひび}き、燃えながら落ちてくる焼夷弾^{しょういだん}が使われるようになって、住宅街も火の海になりました。「連合軍に大損害を与えている」と聞かされていた国民は、あっけにとられてしまいました。

戦場では、日本軍兵士が次々に戦死して行きます。兵隊の数が足りなくなるとは戦えませんから、軍隊では「若者も戦場へ！」と大学や専門学校で学んでいる学生たちに、軍隊への入隊を呼びかけました。

私の兄「高敬^{たかよし}」は、戦争の始まった年に20歳^{さい}の若者でしたが、長男に生まれた兄は、「将来は教師になって、苦労しながら育ててくれた両親に楽をさせたい」と、大学受験のため猛勉強^{もう}をして大学に合格。上京して働きながら学んでいました。

しかし戦争が激しくなり、しかも敵の飛行機^{こうげき}が本土を攻撃してくるようになっては、将来^{しょうらい}を夢見て勉強どころではありません。

学生たちは、「日本が戦争に負けたら家族はどうなる…。こうなったら自分たちが戦うしかない！」と、進んで入隊を志願し、軍隊^{きび}の厳しい訓練を受けました。

連合軍の大艦隊も本土に迫って、航空母艦から飛び立った戦闘機が、逃げ回る人たちを機関銃で狙い撃ちするようになりました。日本国内も、ついに戦場になってしまったのです。

日本軍飛行隊は、必死になって敵の艦隊に襲い掛かって攻撃しますが、爆弾は命中せず、あべこべに撃ち落とされてしまいます。

「何とかして敵艦を沈めて、国を守りたい」と、ついに一人の飛行士は爆弾を抱いた飛行機で敵艦に体当たりして行き、見事に敵艦に命中して敵艦を沈めることができましたが、自分も生きては帰れませんでした。

この報告を聞いた日本軍の司令官は大喜びして、「この戦法で戦おう」と「特別攻撃隊」と名付けて、各地の飛行隊から特攻隊員を募集しました。



兄・高敬

兄・高敬は、茨城県の飛行隊で中尉になって猛訓練中でしたが、特攻隊編成で指揮官として部下とともに出撃することになりました。体当たりの特別攻撃に出撃すれば、生きて帰ることは出来ません。

出撃前しゅつげきに短時間きゅうかの休暇かが取れた兄は、駅に駆け付け、汽車で栃木県の家族もとの許もとに帰って来ました。

しかし、特攻出撃とっこうしゅつげきのことはついに話さず、弟の私には「三郎、しっかり勉強しろよ」と、肩かたに手を置いて微笑ほほえみながら海軍式の敬礼けいれいをし、数時間滞在たいざいしただけで飛行隊もとに戻って行きました。心の中では、「俺が、敵を食い止めるからな」と言っていたのでしょう。

それから半月後。「特別攻撃こうげきで出撃しゅつげきし、沖繩おきなわ近くで戦死」の知らせがあり、間もなく遺骨が入った小さな木箱が、白い布に包まれて家族の許に届けられました。

箱があまりにも軽いので開けて見ると、遺骨ではなく髪の毛の入った封筒ふうとうがあるだけだったのです。…それ以来、我が家から笑い声は、途絶とだえました。

この戦争で、兄や大勢の若者たちが太平洋の海底に沈みました。

沖繩おきなわの近くでは、避難ひなんしようとした学童たちも、船もろとも沈んでいます。

日本の軍隊は「命おを惜しんで敵に降伏こうぷくするな。死ぬまで戦え」と兵隊を教育しましたから、死ぬと判っていながら戦い続ける日本軍のため、連合軍にも死傷者が増え続けます。

人命を大切にすゝアメリカは、早くこの戦争を終わらせようと科学者たちが研究を続け、ついに「原子爆弾」が作りだされました。

強力な爆弾は、ヒロシマそしてナガサキに投下され、一瞬にして十数万人もの人が焼けただれて戦う力を失いました。

この原子爆弾の威力で、日本は連合国に無条件で降伏し、戦争は終わりました。

この四年間の戦争で、日本の国は310万人もの犠牲者を出し、引き換えに平和な生活が訪れました。…しかし、再び戦争が起こったら…

今、世界の国々は戦争に備えて、数万発の「核兵器」を持っています。銃の撃ち合いで戦争が始まれば、自分たちの生命を守るため、相手に向けて核弾頭を付けたミサイルの、発射ボタンを押すつもりです。

放射能で汚染された土地に、人間は住めません。

ヒロシマ、ナガサキ、そしてフクシマが、教えています。

大切な「国」を失って… あなたは、どこへ行きますか？

「平和を守る」のは… 銃ではないのです。

